

## 道綱母の心象

——「もろともに」の意識をめぐって——

塗 木 京 子

根来司氏は『王朝女流文学のことばと文体』の中で、蜻蛉日記にでてこない語彙をもって道綱母の眞の心をとらえるということをなさっている。すなわち「なまめかし」や「なつかし」という形容詞が『伊勢物語』や『大和物語』その他多くの物語や日記などに出てくるのに、『蜻蛉日記』には一例も見出だせないことに注目して、

「なつかし」と「け高し」を両立させることはむずかしくても、これを両立させるのが平安朝の理想の形ではなかつたか。が、蜻蛉日記に一方の「なつかし」がないということは道綱母が親近感の持てる柔和なそれよりも、気高く近寄り難い気品をこよなく望んだということになるのであつた。

と分析されている。確かに蜻蛉日記のなかには「あさまし」「うし」「悲し」「苦し」「辛し」「つれなし」「なやまし」「憎し」「胸痛し」「わびし」といった、わが身の不幸をことさら嘆いた表現が多い。そのため「夫の兼家に愛の集中を求めるのみで、自己を与えることをしない」とか、「全日記を通じてどこでも兼家の愛を自分

一身の上に集注せしめようとする女らしい努力を一度も企てていない」といった印象を与えてしまうことが多い。一般に人が用いる語彙というものには自ずとその人の価値観や生活感情があらわれてくるものであろう。そこで、蜻蛉日記の中の語彙に注目すると、道綱母が客観的に見て幸せであろうと思われる場面と、他の王朝文学ではあまり見受けられない言葉が繰り返して使われていることに気付かされる。それは「もろともに」という言葉である。ここでいう幸せな場面というのは客観的なもので、道綱母は内心認めているながら、「前に述べた一切の事実をあなた方に理由は説明しないが、ことさら認めない」場面をも含むのはもちろんのことである。この「もろともに」という言葉から、道綱母の心象を探ってみたい。

### (一) 『蜻蛉日記』の中の「もろともに」

まず少し煩雑になるが、客観的に道綱母の状況がよくわかるように日記に即して「もろともに」という言葉の用例を書きだすと

次のように二五例ある。

1 そのころ、五月廿よ日ばかりより、四十五日の忌たがへむとて、祟ありきのところに渡りたるに、宮、たゞ垣をへだてたるところに渡り給ひてあるに、六月ばかりかけて雨いたうふりたるに、たれもふり籠められたるなるべし。(宮との贈答が続き) 又、宮より、

しかもぬ君ぞぬるらんつねにすむところは又こひちだになし

「さもけしからぬ御さまかな」などいひつゝ、もろともに見る。(上巻)

2 日ごろなやましようてしはぶきなどいたうせらるゝを、例もものする山寺へのぼる。十五六日になりぬれば、盆などするほどになりけり。見れば、あやしきさまに荷なひいたゞき、さま／＼にいそぎつゝ、集まるを、もろともに見てあはれがきもわらひもす。(上巻)

3 年かへりて、なでうこともなし。人の心のことなることなき時は、よろづをひらかにぞありける。……例の宮にはおはせぬなりけり。町の小路わたりかときまひりたれば、うべなく「おはします」といひけり。まつ視こひて、かく背きいれたり。

きみがこのまちなみなみにとみにおそきはるにはいまぞたづねまいれる

とて、もろともにいでたまひけり。(上巻)

4 そのころほひすぎでぞ、例の宮にわたり給へるに、まいりたれば、去年も見しに花おもしろかりき、すすきむら／＼しげりて、いとほそやかに見えければ、「これ掘りわかたせたまはば、すこし給はらむ」ときこえをきてしを、ほどへて川原へものするに、もろともなれば、「これぞ、かの宮かし」などいひて、人を入る。(上巻)

5 (寺で母が死に、自邸に帰る) 道すがらいみじうかなし。下りて見るにも、さらに物おほえずかなし。もろともに出でいつゝ、つくろはせし草なども、わづらひしよりはじめてうちすたりければ、(上巻)

6 (兼家病氣回復し、兼家邸に道綱母が会いに行つた時の兼家の言葉) 「まだ魚なども食はず。今宵なんおはせばもろとも、とてある。いづら」(上巻)

7 (6の次の日の朝) 「いとかたはなるほどになりぬ」など急げば、「何か。いま粥などまいりて」とあるほどに、昼になりぬ。さて「もろともに帰りなん。またはものしかるべし」(上巻)

8 かくて、年ごろ願あるを、いかで初瀬にと思ひ立つを、立たむ月と思ふを、さすがに心にしまかせねば、からうして九月に思ひ立つ。「たたむ月には大嘗会の御祓、これより女御代いで立たるべし。これすぐしてもろともには」とあれ

ど、わが方のことにはしあらねば、  
(上巻)

9 (初瀬詣に一人出掛けた道綱母を出迎えた兼家のもとに、  
按察使大納言より)「かうものし給とききて、もろともにと  
おもふも、あやしう物なき日にこそあれ」とあり。(上巻)

10 おはやけに相撲のころなり。(兼家に連れていってもらつた道綱が一人で帰ってきたのを見て)ひとりまかでていかに心に思ふらん、例ならましかば、もろともにあらましもものと、おさなき心地に思ふなるべし。  
(中巻)

11 ついたちの日、おさなき人をよびて、「ながき精進をなんはじむる。』もろともにせよ」とあり」とて、はじめつ。  
(中巻)

12・13 (鳴滝般若寺への行き道) 山路なでふことなけれど、あはれに、いにしへもろともにのみ、ときくは物せし物を、また病むことありしに、三四日も、このころのほどぞかし、宮づかへも絶え、こもりてもろともにありしは、などおもふに、はるかなる道すがら涙もこぼれゆく。  
(中巻)

14 (鳴滝に籠もっている道綱母に父が下山を勧めて)「げにかくてもしばしをこなはれよと思ひつるを、この君いとくちおしうなりたまひけり。はや、なを物しね。今日も日ならばもろともに物しね。今日も明日も迎へにまいらん」(中巻)

15 (鳴滝から兼家に連れて帰られる途上) 大門ひき出づれば乗りくは、りて、道すがらうちも笑ひぬべきことどもをふさ

にあれど、夢路か物ぞ言はれぬ。このもろともなりつる人も

「くらければあへなん」とて、おなじ車にあれば、(中巻)

16 (鳴滝より帰つた夜)「方は何方かふたがる」といふに、数ふればむべもなくこなたふたがりたりけり。「いかにせむ、いとかきわざかな。いざもろともに近き所へ」などあれば、いらへもせで、あな物ぐるほしけれ。  
(中巻)

17 県ありきの所、「初瀬へ」などあれば、もろともにとて、つ、しむ所に渡りぬ。  
(中巻)

18 (兼家が通っていた兼忠女の歌)  
おほつかなわれにもあらぬくさまくら又こそしらねか、  
るたびねは

とぞありしを、「たびかさなりたるぞあやしき。などもろとも」とてわらひてき。  
(中巻)

19 ちるさき人(養女)には手ならひ、歌よみなどをしへ、こ、にてはけしうはあらじと思ふを、「おもはずにてはいとあしからん。いまかしこなるともろともにも裳着せむ」などいひて、日くれにけり。  
(下巻)

20 十日、賀茂へまうづ。「しのびてもろともに」といふ人あれば、「なにかは」とてまうでたり。いつもめづらしき心ちするところなれば、今日も心のばはる心ちす。  
(下巻)

21 十八日に、清水へまうづる人に、又しのびてまじりたり。初夜はててまかづれば、時は子許なり。もろともなる人のと

「ころにかへりて……」

(下巻)

22 「しのびたるかたに、いざ」とさそふ人あり、「なにかは」

とてもものしたれば(そこにつらら袖に包んで食べている人がいて) ゆえあるものにやあらんと思ほどに、わがもろともなる人、ものをいひかけたれば、

(下巻)

23 (遠度は養女との結婚を引き延ばされて) さくねりても又

の日、「助の君、けふ人のがりものせんとするを、もろともに寮にときこえになん」とて、門にもものしたり。

(下巻)

24 すこし日たけて、頭の君(遠度)「手つがひにものしたま

はば、もろともに」とあり。「さぶらはん」といひつるを、しきりに「をそし」などいひて人來れば、ものしぬ。(下巻)

25 (臨時の祭で道綱が急に舞人へ選ばれて、兼家から)「け

がらひの暇なところなれば、内裏にもえまいるまじきを、まいり来て見出したてんとするを、よせ給まじければ、いかすべからん、いとおほつかなきこと」とあり。胸つぶれて、いまさらになにせんにかと思ふことしげ、れば、「とくさうぞきて、かしこへおまいれ」といそがしやりたりければ、まづぞうち泣かれける。もろともに立ちて、舞ひとわたりならさせて、まいらせてけり。

(下巻)

上巻に九例、中巻に九例、下巻に七例と、ほぼ平均して使われている。歌の中で使われることはなく、会話文の中で使われるのが十一例である。会話者でみると、兼家が道綱母に対して四例、

遠度が道綱に対して二例、道綱母の父・倫寧が道綱母に一例、按察使大納言が兼家達(道綱母も含んでいると考えてもよいだろう)に対して一例、道綱母の知人が道綱母に一例、僧かあるいは兼家か、はっきりしないが道綱母に対して一例がある。道綱母自身は会話のなかではこの言葉を使っていないのがわかる。また、「もろともに」の中身であるが、兼家と道綱母をさすのが十例、この二人とも一人というのが、用例の3と9で、あわせて十二例もが兼家と道綱母が「もろともに」何かをしたことになる。それぞれの例を検討し道綱母がどのようなときに「もろともに」を使っているかを考察したい。

まず1・3・4は章明親王との交歓である。道綱母は藤原北家の傍流に属するが、父倫寧の社会的地位ははっきりりと受領の階層に固定してしまっている。本来なら親王といった階層の人との接点は持ちにくく、まして夫兼家を通してとはいえ歌の贈答を楽しむんだりすることはできなかつたであろう。兼家の町小路女への愛もさめ、閑職になった兼家ののんびりとし「よろづおいらか」な頃である。木村正中氏も「兼家妻としての誇りや、歌人としての自負心を、大いに満足させるものであったに違いない。」<sup>(5)</sup>と言われるように、道綱母にとって非常に幸せであった頃の描写である。2も同じ頃で身体の調子の悪い道綱母に付き添った兼家と山寺へ登る道中である。二人の幸せそうな様子が彷彿とされる場面である。5は道綱母が亡くなった母親を偲んでいるところであるが、

「もろともに、出でいつ、つくるはせ」ていたころは、母との幸せなひとときであつたであろう。6・7は「王朝エロティシズムの極致をなすとも言いうるのであり、夫のやさしい誘いと配慮に對してひたすらに尻込みする著者の反応には、多分に女としての歎びの表現のポーズが感じられ……本日記の中で夫婦の愛の機微を描いてこの上なく美しい場面」であろう。とくに兼家が「もろともに」「もろともに」と言っているところは「作者は作中主人公に重なり合い、その心の軌跡を語り進めていく。ただ、作者が統括しているのは、作中人物の一人である主人公のみではなく登場する人物総てであることは言うまでもない。……会話文には純粹な創作性が認められる」<sup>(7)</sup>であろうから、道綱母が兼家に言わせていると考えてもよいであろう。8・9は、兼家が止めるのも聞かず、道綱母が一人で初瀬詣に出掛けてしまった時のことであるが、この時、兼家は盛大に道綱母を迎えにきてくれている。9では按察使大納言の「こうしておそいでおこしの由を伺つて、一緒に食事でもと思ひますが」の「もろともに」の中には兼家だけではなく道綱母をも含んだニュアンスが感じられるものである。当時の超一流の人と對等に扱われている満足のほども窺えるのではないだろうか。また

あるすき者ども、酔ひあつまりて、「いみじかりつるものかな。御車の月の輪のほどの、日にあたりて見えつるは」ともいふめり。

と、わざわざ從者の言つた言葉を書き残しているのも道綱母の満足の表れであろう。10は「例ならましければ、もろともにあらまし」ということで「もろともに」帰つてくる状態が望ましいわけである。「もろともに」にあることが幸せを象徴的に表しているという道綱母の気持ちの表れであろう。11ではほとんどの注釈書が「陰陽師または僧のことば」としている。実際にこの言葉が使われていたかどうかは不明である。12・13は天祿二年六月の描写であるが、2の頃を回想している。道綱母の中で幸せな場面はこの兼家と「もろともに」いることと結びついているのがよくわかるのではないだろうか。14は道綱母の父親の言葉で、親の愛憎のあふれる言葉であろう。15は道綱母の妹を指し、この場合は、道綱母の意図は感じられない。16では「あなものをぐるほしけれ」とあるが兼家から道綱母への思いが強いことがこの兼家の言葉によつて読み手には逆に印象づけられるのではないだろうか。17も父から道綱母への誘いの言葉である。18は実際には天徳二年七月・八月の頃の回想である。章明親王と交流のあつた頃である。この箇所はほとんどの注釈書に、

おほつかなわれにもあらぬ草枕まだこそ知らねかかる旅寝はとぞありしを「旅かさなりたるぞあやしき」などもろともにも笑ひてき。

というようにあり、道綱母と兼家が「もろともに」兼家の道所の兼忠女の手紙を見て、笑つと解釈されている。いずれにしても

夫のもとに届けられた別の女性からの歌を見たり、批評して笑っているというのは、測り知れない優越感を道綱母に感じさせていたのではないだろうか。19はこの時点では養女と時姫側の詮子とが同等であることを示すものである。兼家が養女と詮子とを同じように考えていた（実際どうかはわからないが）ことを読み手に感じさせることができよう。20・21・22は物語のときのものである。女の人は、物語には「もろともに」誘いあつていくことが多いのであつたのである。23・24は速度から道綱への言葉である。25は『蜻蛉日記』最後の場面とも言えるところで、道綱母と兼家との関係が完全に終わってしまったことも示す箇所である。兼家と道綱母の関係は断たれても道綱と兼家の関係は終わるものではないだろう。「もろともに立ちて、舞ひとわたりならさせて」という父と子のあるべき、幸せな状態は続く、続かなくてはならないという思いが道綱母にはあつたのではないだろうか。

以上のように二五例全てとは言えないが、ほとんどが道綱母が幸せであつた頃の回想場面で「もろともに」という言葉が使われている。道綱母にとつての幸せとは、結局兼家と「もろともに」何かをしたり、見たりすることであつたのではないだろうか。そういう状況が道綱母の描いた「幸せな光景」であつたと考えられるのである。

## (二)『和泉式部日記』には使われない「もろともに」

『蜻蛉日記』と同じように男女の愛情を描いた『和泉式部日記』であるが、ここには「もろともに」の用例が一例もない。男女の愛情を素材とした『和泉式部日記』に「もろともに」という言葉が一度も使われていないのはどうしてであろうか。道綱母が望んでいたであろう「幸せな光景」の象徴ともいえる、愛する人と「もろともに」にある状態を和泉式部はどう表現したのであろう。

・(和泉式部は)あやしうすげなきものにこそあれ、さるはいとくち惜しうなどはあらぬものにこそあれ、よびておきたらまし、と(宮は)おほせと、

・やおらたてまつりて(女の家)におはしぬ……おはしまして、帰らせ給ひぬ。

・人の便なげにのみ言ふを、あやしきわざかな、ここのかくてあるよ、などおほす

・更けぬらんと思ふものからねられねどなかなかなれば月はしも見ず、とあるを、おし違へたる心地して、なほくち惜しくはあらずかし、いかで近くて、かかるはかなしごとをも言はせてきかん

・その日も暮れぬれば、おはしまして、こなた(女の家)のふたがれば、しのびて、ゐておはします。このころは、四十五日の忌み違へせさせ給ふとて、御いとこの三位の家におはし

ます。例ならぬ所にさへあれば「見苦し」ときこゆれど、いひてゐておはしまして……明けぬれば、やがてゐておはしまして、人の起きぬさきにと、いそぎ帰らせ給ひて……

「おきたらまし」「(宮が)おはす」「ある」「ちかくて」「ゐておはす」というもので二人が一緒にいる状況は同じでも、道綱母とは表現の仕方が随分と違ふことに気付く。主体はあくまでも親王相手の男性側であるのが、『蜻蛉日記』の表現と較べると明らかに異なるのではないだろうか。和泉式部は娘の小式部内侍が亡くなつて後、次のような哀感あふれる歌を詠んでいる。

もろともにこけのしたにもくちもせでうづもれなむをみるぞ  
悲しき

娘に対しては「もろともに」という表現を使っているのである。道綱母は、兼家と共にいる状態に「もろともに」という言葉を多用し、和泉式部は親王と共にいる状態に一度も「もろともに」という言葉を使つてはおらず、娘には使っている。この違いはどこから来るのであろうか。それはやはり立場の違いではないだろうか。『蜻蛉日記』の中でも男女の関係に限つて考えると、実際に口に出して「もろともに」を使つていたのは兼家であつて、道綱母は一度も口には出してない。「もろともに」という言葉は、立場的に同等かあるいは立場的に上の者が使うことが多かったのではないだろうか。『蜻蛉日記』の会話文でも男女の間のことは兼家の言葉の中しか使われていなかった。しかし道綱母は、口

にこそ出していなかったが、兼家と「もろともに」にあることを、つまり同等に存在することを望んでいた。その心の表れが「もろともに」の多用となつたのではないだろうか。

他の作品を見ると、『伊勢物語』では「もろともに」の用例は二三段に一例あるが、この場合の「もろともに」は男女が不幸せな状態であることを表しており、『蜻蛉日記』とはかなり違つている。が、やはり「田舎わたらひしける人の子ども」同士の間柄であり、また男のほうの発想であつた。『平中物語』には用例はない。「古今集」ではわずか一例あるがここでは男女間を表してはいない。『土佐日記』にも一例あるが、この二例も共に男女の間を指してはいない。『大和物語』に、監の命婦が藤原忠文の息子に贈つた

みちのくの安達の山ももろともにこえはわかれの悲しからず  
や (七〇段)

兵衛の尉(堤中納言兼輔の男)が公平の三女に贈つた

もろともに井出の里こそ恋しけれひとりをり憂き山吹の花  
(一一三段)

閑院の大君(是忠親王の孫)がさねき(藤原真興か)へ贈つた

もろともにいざとはいはで死出の山なかはひとりこえむと  
はせし (一一九段)

藤原高経の女、兵衛の命婦が昔物語の絵の主人公になり代わつてよんだ

つがのまもろともにとぞ契りけるあふとは人に見えぬもの  
から  
(一四七段)

の四例があり、いづれも歌にのみ使われている。七〇段の歌は監の命婦が藤原忠文の息子に贈ったものである。この二人についてくわしいことはわからないが、監の命婦ということは、近衛府の将監を父か夫にもった、五位以上の女性であろう。また藤原忠文は右衛門督であるがその息子は、また若くして亡くなっているのであるから(七〇段後半に「道にて病してなむ死にける」とある)二人はほぼ対等な立場であつたのではないだろうか。一一三段では兵衛の尉(堤中納言兼輔の男)が藤原公平の三女に贈っている。一一九段では閑院の大君は是忠親王の孫で身分は高く、歌を贈つた相手の真輿は大君に「いかで対面給はらむ」と敬語を使っている。一四七段の歌を詠んだのは兵衛の命婦であるが、ここでは物語の主人公になり代わつて詠んでいるので例外であろう。「後撰集」では次の五首である。

男の、ほど久しうありてまで来て、「み心のいとつらさ  
に十二年の山籠りしてなんひさしう聞えざりつる」と言  
ひ入れたりければ、呼び入れて、物など言ひて、返しつ  
かはしけるが、又音もせざりければ  
出でしより見えずなりにし月影は又山の端に入やしにけん  
返し

① あしひきの山におふてふもろかづらもろともにごそいらま

ほしけれ

(恋二)

朝顔の花前にありける曹司より、男のあけて出で侍け  
るに よみ人しらず

② もろともにおるともなしに打ちとけて見えにける哉朝顔の

花

(恋三)

公頼朝臣の娘に忍びて住み侍けるに、わづらふ事あり  
て、「死ぬべし」と言へりければ、つかはしける

朝忠朝臣

③ もろともにいざと言はずは死出の山越ゆとも越さむ物なら  
なくに (恋五)

人のもとより、「久しう心地わづらひて、ほとくし  
くなんありつる」と言ひて侍ければ

閑院大君

④ もろともにいざと言はずは死出の山いかでか一人越えんとは  
せし (雑三)

(先坊うせたまひて) 同、同年の秋

⑤ もろともにおきみし秋のつゆばかりかからん物と思ひかけ  
きや (慶賀・哀傷)

⑤以外の歌はすべて「恋」の歌である。①は、冗談を言い合う間柄の男女の贈答である。②もよみ人しらずの歌であるが、「朝忠集」では大輔に対する朝忠の歌ということになっている。いずれにしてもお互い打ち解けた間柄であることはわかる。③も男から女へ

の贈答である。④は、前掲の『大和物語』にとられていたものである。『紫式部日記』ではわずかに二例あるだけで、ここでも男女間には使われていない。

道綱母が兼家の「妾」であったのか「妾」であったのかについては、いろいろと論じられるところではあるが、少なくとも和泉式部のような立場でなかったことだけは確かであろう。道綱母自身、強い矜持を持ち続けた女性であったと思われる。そのような意識が、「もろともに」という言葉の多用に繋がっていったのではないだろうか。

### (三) 歌に使われる「もろともに」から

『大和物語』では「もろともに」という言葉は歌にのみ使われていたが、『宇津保物語』でも地の部分では使われず、歌にのみ十二例使われている。

今までの用例を見てくると、「もろともに」という言葉は歌によく用いられていると言えるのではないだろうか。そこで歌の中で使われ方を見てみると、「もろともに」見る（ながめる）」という表現が多いことに気付く。

もろともにをりしむかしをおもひいで花みることにねぞなかれける  
(伊勢集)

今までに昔の人のあらませば諸共にこそそゑみてみましか

(貫之集)

はなのいろをみるにつけつつもろともにをりしむかしの人ぞ  
こいしき  
(能宣集)

しづみぬるみくづならずはもろ共にけふ白河の花は見てまし

(太宰大式重家集)

もろともに見むひとがなひとりのみをればかひなきとこな  
つの花  
(西宮左大臣集)

もろともにをるとはなしにうちとけてみえやしぬらんあさが  
ほの花  
(朝忠集)

もろともにおくるあしたもまだ見ぬににのひかけのまばゆ  
かるらん  
(実方集)

もろともにまつべき月もまたずしてひとりもそらをながめけ  
るかな  
(実方集)

もろともにあひ見ぬぬまのねをひけばわすれやしにしながら  
らぬなか  
(小大君集)

もろともにあふともなくてあふ坂の関のまにまに花を見にけ  
ん  
(馬内侍集)

都にてながめし月のもろともにたびの空にもいでにけるかな  
もろともにをりしはるのみこひしくてひとり見まうき花ざか  
りかな  
(拾遺集・よみ人しらす)

もろともに有明の月をみしものをいかなるやみにきみまどふ  
らん  
(千載集・藤原有信)

「もろともに見し入いかになりにけむ月はむかしにかはらざり  
けり  
(千載集・登蓮法師)

『蜻蛉日記』の用例でも1と2で、道綱母は親王の手紙や、山寺  
への道中の様子を兼家と非常に幸せそうに「もろともに見」たこ  
とが回想されている。紫式部の場合も、その日記では「もろとも  
に」は二例しか用例がなかったが(男女のことを描いたのではな  
いので当然かもしれない)、『源氏物語』の中では四十九例の用例  
があり、そのうち八例で「もろともに見る、ながめる」を効果的  
に用いている。

1 (夕顔の家で) 白たへの衣うつ砧の音も、かすかに、こなた  
かなた聞きわたされ、空飛ぶ雁の声、取り集めて忍びがたき  
こと多かり。端近き御座所なりければ、遣り戸を引きあけて、  
もろともに見出したまふ。(夕顔)

2 姫君のいとつくしげにつくろいたててあはするをうち笑  
みて見たてまつりたまふ。

「君はいざたまへ。もろともに見むよ」とて (葵)

3 (源氏からの手紙を乳母は明石の女君と) 御文ももろとも  
見て、心のうちに、「あはれ、かうこそ思ひの外にめでたき  
宿世はありけれ。……」 (落標)

4 殿に古きも新しきも絵ども入りたる御厨子ども開かせたま  
ひて、女君(紫上)ともろとも、今めかしきはそれぞれと  
(絵を) 選りとのへさせたまふ。(絵合)

5 女御の君(明石の姫君)も(病気の紫上のもとに) 渡りた  
まひて、(源氏と) もろともに見たてまつりあつかひたまふ。  
(若菜下)

6 (薫は) 光見えつる方の障子を押し開けたまひて、空のあは  
れなるをもろともに見たまふ。女(大君)もすこしゐざり出  
でたまへるに (総角)

7 (匂宮が中の君と) 明けゆくほどの空に、妻戸おし開けたま  
ひて、もろとも誘ひ出でて見たまへば (総角)

8 (六の君と結婚した匂宮が、中の君の) らうたげなるありさ  
まを見察でて出づべき心地もせず、いとほしければ、よろづ  
に契り慰めて、もろとも月に月をながめておはするほどなりけ  
り。(宿木)

3は男女を指してはいないが、何れにしても美しい場面ばかりで  
あろう。『新撰六帖題和歌』(一一四四年)では「ふたりをり」と  
いう題の最初の歌に「もろともにかけをならぶますかが見見て  
だにあかぬころなりけり」というのがあがっている。「もろと  
もに見る、ながめる」というのが幸福な男女の姿としてパターン  
化されたようにも見受けられるのではないだろうか。男女の美し  
く幸せな光景の象徴的なものとして「もろともに見る」という表  
現が定着していたように思われるのである。またそれは主に歌の  
世界のものであったのを道綱母を始めとするあたりから、歌以外  
の世界にも持ち込まれていったのではないだろうか。そこには社

会的な身分の差や、諸々のこだわりを越えた世界があつたらう。道綱母にとつての幸せなイメージは、とにかく兼家と「もろとも」になにかをしていることではなかつたらうか。その意識が自然と「もろともに」という言葉の多用となり、のちに「もろともに見る」へと繋がつていったものと考えられるのである。

〈テキスト〉

『蜻蛉日記』源氏物語は新日本古典文学大系本、『和泉式部日記』は新潮日本古典集成本、『大和物語』『万葉集』は日本古典文学全集本による。

(ぬるき きょうこ) 平成十一年三月、文学研究科修了)

研究室受贈図書雑誌目録(三)

青山語文(青山学院大学日本文学会) 二一九

旭川国文(北海道教育大学旭川校国語国文学会) 一四、一五

霞 四・五号(山崎勝昭)

アジア・アフリカ言語文化研究所通信(東京外国語大学アジア・

アフリカ言語文化研究所) 九五、九六

字大國語論究(宇都宮大学国語教育学会) 一一

歌子(実践女子短期大学国文学科) 七

王朝細流抄(安田女子大学大学院古代中世文学研究会) 三

王朝文学研究誌(大阪教育大学大学院古典文学研究室) 一〇

大阪樟蔭女子大学論集(大阪樟蔭女子大学学術研究会) 三六

大谷女子大國文(大谷女子大学国文学会) 二九

大妻国文(大妻女子大学国文学会) 三〇

大妻女子大学紀要—文系—(大妻女子大学) 三一

大妻女子大学大学院文学研究科論集(大妻女子大学大学院文学研究科) 九

注

1 根来司著『王朝女流文学のことばと文体』一九八八年 有精堂

2 長野啓一「嫉妬」 解釈と鑑賞 昭和四一年三月号「宮廷女性の日記に潜む女の業」

3 小島政二郎著『わが古典鑑賞』昭和三九年 筑摩叢書

4 清水好子「日記文学の文体」 日本文学研究資料新集3「かげろふ日記・回想と書く事」所収 一九八七年 有精堂

5 4所収の木村正中「蜻蛉日記の主題と構造」

6 深沢三千男「蜻蛉日記の読み方への疑問」 論集中古文学3「日記文学作品論の試み」所収 一九七九年 中古文学研究会

7 4所収の石坂妙子「蜻蛉日記の会話者たち」

8 上村悦子校注『蜻蛉日記』 講談社学術文庫

9 上村悦子著『蜻蛉日記解釈大成5』 平成元年 明治書院

10 工藤重矩著『平安朝の結婚制度と文学』 平成六年 風間書房

11 以下の歌はすべて『国歌大観』による